

暑さに苦しみながらの放浪、反転の長蛇の列が幾日か続いた。

やっとたどりついたのは鎮江で、すでに秋なかばであつた。ひとまずこの地に駐留した。そのころには戦友たちも敗戦の興奮からさめたのか、来年は復員出来るかとの噂もではじめ、あまり口にしなかつた国もとの親、兄弟、姉妹、妻子の安否を気づかうようになった。互いに出身地を明かし、望郷の思いを語り、俺は沖繩の出身だ、広島だという。玉碎あるいは原爆投下の報が伝わってきたがまったくくわしいことはわからない。いろいろな不安が交さくする。

また、召集兵の一人は、昭和十六年に滿蒙の開拓団に入植、黒河省の国境に近い孫呉に女房子供を残し現地召集できたと、声を詰まらせる。樺太出身の兵隊もいた。ソ連軍の参戦で樺太全土の婦女子は強制疎開を強いられ、羅災した住民は西海岸に逃げまどう。ソ連軍の艦砲射撃によって真岡の町はぐれんの火に包まれたと報道された古新聞を手に涙ぐんでおつた。

昨日まで生死を共にした戦友達をみるにつけ、きくに

つけきょうがく悲痛どうか災禍からまぬかれておつてくれと肩を寄せあい敗戦の悲運をたがいにかみしめなくさめあつた。

大陸の戦い

愛知県 小林 詮 一

私は昭和十六年兵で、関東軍要員として中部六部隊に入隊、三か月の教育を受けて、征途についた。満州国奉天省鉄嶺の満州第六八九部隊に到着、初年兵教育が終了すると勤務が始まつた。

とくに厩当番は二班、二班の厩舎で約七十頭の軍馬を夜間は一人で管理するのである。癖の悪いのが一班、二班で十頭ぐらいいはいたと思う。初年兵ではそれぞれの馬の癖がわからず、ひたすら事故のないよう祈るばかりである。乗馬訓練ではあぶみなしの裸馬から始まり、尻の皮が破け猿の尻のようで、入浴どころではなかった。入浴しないわけにはいかず、入浴に行けば初年兵は裸で一

列に並ばされて直立し、両手を前にたおして尻を並べ
ヨーチンをべたべたとぬられ、飛びあがるほど痛かっ
た。

訓練に訓練を重ねて乗馬にもなれ、戦闘訓練にもみが
きがかかり、このように日夜軍務に精励し、一端緩急あ
る日にそなえた。

昭和十八年暮ごろより関東軍は「ソ満国境はソ連との
不可侵条約により危険なし」との見地から軍を南方にと
徐々に移動しつつあったように思われた。我六百八十九
部隊もこのころから徐々に転属が始まり、各地の部隊へ
と移動が始まった。我々も十一人の戦友と共に錦州第二
十七師団司令部へ転属を命ぜられ実弾を支給され出発し
た。

昭和十八年二月七日、ガタルカナル島撤退以後、南太
平洋方面は当初の攻撃から守勢にまわることを余儀なく
され、同方面に戦力を集中するため支那派遣軍からの転
用が図られた。事実第三十六、第三十、第三十二、第三
十五、第二十二の各師団が昭和十八年末から十九年初め
にかけて南東・南西太平洋に派遣され、さらに五、六師

団が総予備として待機の姿勢であった。もちろんこれら
のことは当時の我々の知るところではなかったが、在錦
州の我々の在留邦人との接触も多く、新聞・ラジオ等
によってビルマや南太平洋方面の戦局が重大化しているこ
とや、輸送船の沈没などのニュースももたらされているこ
とだ。このため我々の向かうのは南方ではないかとうわさ
されていた。

昭和十九年三月十八日、師団の移動命令が発せられ、
八か月を過ごした錦州をあとに我々を乗せた列車は、一
路北支方面を屈指した。行く先は不明だが夜の天津、北
京を通過し京漢線を南下するに及んで、目的地は黄河の
南、河南と推定された。

新郷で下車、司令部は前駐部隊の残した兵営にはい
る。師団はそれから約一か月各連隊を黄河の北岸に位置
させて、南岸の鄭州、洛陽を攻撃する軍主力を援護する
ための陽動、陽渡河に従事した。

四月下旬になって軍主力の渡河進展にもなって作戦
は第二段階に入り、四月二十四日よいよ大黄河を渡る
こととなった。渡河は夜、月はなく僅かに足もとがわか

るていどの星月夜であった。突然林軍曹の低いがすごみのある声がひびき「第一番小林出発」の命令がでた。軍馬「梅咲号」の手綱を握りしめて大黄河の渡河の先陣に踏み出した。橋は工兵のつくった鉄ぶねと筏をつないだ浮橋で、延々一里に近い長さである。とうとうと流れる河の音は聞こえても暗いのでその姿はみえない。大黄河渡河の師団の先達として失敗は許されない、万一失敗すれば後続の人馬はこの大黄河に呑み込まれてしまうのである。その責任感がひしひしと胸にせまり思わず八幡大菩薩に祈った。

渡河後引きつづいて前進し、夜が明けたころには黄河から相当にへだたっていて、ついに悠久に流れるその姿には接することは出来なかった。

渡河して二日目あたりから猛烈な雨に見舞われ、朝から終日降りやまず、道はぬかって泥濘と化していた。宿营地には師団長始め各部長が到着したが、管理部の行季が到着しない。追いついて来たのは翌日の宿营地あたりで、寝る暇も惜しんで泥土のなかをひたすら追及して来たのであろう。この行李班は白川准尉の指揮で少数の護

衛兵が苦力を督励して台車を牛に引かせていたのだが、泥濘は台車の進行を許さず、全部を駄載に切りかえて苦心の末、本隊に追いついたという。当然相当の物資は放置しなければならず、行動の当初から前途が案ぜられた。

師団が第一部隊となったのは許昌城の攻略からで、爾後独力をもって京漢線打通のために中支派遣軍の最前線確山に向かって南下作戦に移行することとなった。許昌城攻略が五月一日、続いて敵一個師団のこもる鄆城を全力で攻撃し、五月六日みごとにこれを占領、多大の戦果をあげた。この成果によってわが師団の南下は極めて容易になり以後、西平、遂平の敗敵を排除しつつ五月九日確山に着く。そして漢口から北上した宮下旅団と手を握った。

この作戦中再々アメリカ空軍機の来襲があり、そのために各隊の行動は夜行軍となった。五月十四日准水にかかる長台関の鉄橋が一部敵に破壊されて通行困難に加えて、あとから続く各隊が橋の手前にいちじるしく停滞し収拾のつかない混乱状態となり、真暗闇のしかも豪雨中

の渡橋とあって一時しのぎの部落も見つけることが出来ず、疲労に加えて気温の急激な低下が睡魔を招き、ついに死に至った者が相当数にのぼったという。その長台関の悲運は戦闘以上に師団全員の痛恨事として銘記されるようになった。

その後、京漢線の路盤上を歩き大別山脈を越えて信陽に着いた。信陽から汽車輸送で五月十八日に漢口着、兵站にはいる。漢口滞在は僅か一週間程度であった。ここで夏被服との交換があり、はじめて帽垂れが支給され、さらに南下することを暗示するものであった。

昭和十九年五月二十四日、対岸の武昌に渡り、いよいよ湘桂作戦の第一段階である湖南作戦が展開された。この作戦の目標は第一の衡陽の占領であり、第二には桂林地区への進行とあわせて粵漢線の打通であった。ここで師団はすべて車両をすて駄馬編成に改編した。駄馬編成ということとは部隊の全員が道のないところを行動できるということであるし、食糧などの後方からの輸送はないということも意味する。事実その後、広東省惠州にいた一時期を除いては昭和二十年八月の終戦にいたるまで食

糧はすべて現地徴発であった。わずかに弾薬・医薬品が数回送られてきたのみで、被服などの支給はなく、数か月もすると中国服や中国靴の兵隊をずいしょでみられるようなありさまとなった。

馬の飼料は携行の鎌で青田刈りするのが常時であった。この作戦にはいってから米軍機の来襲がしつようを極めたため、通常は夜行軍となるか、時には日中行軍のこともあった。そのような時に空襲を受けるようなことがあると、我々騎兵にとってはまことにみじめである。近くに林でもあれば馬をとばせてかくれるすべもあるが、はげ山の頂点ではただくつわをもって、じっと待つよりしかたがない。馬は活兵器である。これを手から放して自分だけ物陰にかくれることなど絶対に出来ないのだ。敵機の退散を待つばかりである。

六月二十五日師団は、第一線部隊に転じ瀏陽（長沙東砲約七十キロの山岳地帯）醴陵、萍郷の敵との戦闘にはいった。わが方の二個師団に対して敵は五個師団内外で戦闘はしれつをきわめたが七月下旬にいたってようやく敵は萍郷の東南方に退却を始めたので、師団は蓮花方面

に向かつて追撃に転移した。蓮花に向かう南下作戦は峻険な山岳通過で、山峽にそって通じている細道を全師団は一列縦隊となつて進んだが、途中一師団程度の抵抗もあつて、予想以上の日時をついやして八月中旬、駐留警備地、茶陵付近に進出した。このころ四二日間に及ぶ攻防の末、粵漢線の要衝・衡陽もわが軍の手に落ちて、鉄道隊の手によつて衡山、衡陽間には列車が運行されてゐた。

九月中旬、師団は緑田に進出、緑田は広大な斜面のうゑに一直線に延びた街道上の宿場のようなところで、我々の隊はその数軒に分散分宿してゐた。この頃わが師団は新郷いらいのはげしい戦闘と行軍の連続で兵力の消耗が甚だしく、その数は総数の三分の一ぐらゐと聞いた。そのため、ここで隷下部隊に召集兵の補充が行われわが隊にも同様配属があつた。

十、十一月は雨期にあつていて毎日じとじとと降る雨には、まったくやりきれない気持ちであつた。このころシラミによる被害は熱病となつてあらわれ、これを回帰熱といひ、四十度を越す熱がでる。マラリヤと違ひこ

の四十度の熱は四六時中、あがりっぱなしで、なかには幻覚症状をていする者も出てきた。とくにり患するのは我々馬関係の者ばかりで、隊員四十人中半数以上になつたのではないかと思う。

この回帰熱には特效薬がある。サルバルサンである。緊急事態であるので軍医は八方手を尽くしてようやく入手し、患者に注射すると全員ウソのようになおつてしまつた。

師団のつぎの目標は遂州贛州地区にある米空軍基地の覆滅である。昭和二十年一月十日緑田を出発した。この進路は万洋山系を横断する湖南省から江西省にはいる山岳路で峻険な山道が続き、途中、幾度か山砲の分解搬送をみている。我々もしばしば馬をおりて引いて行く場面もあつた。この作戦には優秀な敵が健在してわが軍の進行も容易でないと判断してゐたが、予期に反して敵の間隙をぬう結果となり一月二十九日まづ前衛支那駐屯歩兵第三連隊が遂川飛行場に突入占領し、司令部も続いて飛行場を横断したが、いくつかの米軍飛行機の残骸をみ

つぎの目標は贛州飛行場で、これは無血占領である。

贛州は江西省の省都で、約一か月郊外に駐留し、隸下部隊を面飛行場に残置して敵の回復攻撃にそなえた。

昭和二十年三月十二日、贛州を出発しまもなく南支派遺軍のれいかにはいり、広東省惠州に向かった。広東省惠州では弾薬、被服、医療品等全般にわたって補給がおこなわれたのち、華東戦線への転出は惠州―三南地区―贛州―吉安―南昌である。

昭和二十年四月、わが沖繩は敵米軍の攻撃を受ける事態となり軍の東シナ海沿岸方面の戦備強化の意図で、わが第二十七師団は陸路華北の済南方面に反転することとなった。北上には先に我々が打通した粵漢線、京漢線上にそって行くのが敵の抵抗が最も少ないわけだが、同方面の食糧の不足には、我々はいやというほど身にしてみても、敵の抵抗はあっても物資豊富な戦闘処女地を通過する方がとくさくということになった。まづ三南地区を通過、贛州から贛江をはさんで右岸を第四十師団が、左岸をわが第二十七師団が北上することとなった。この間わが師団は十万を越える五、六個師団に囲まれつつ、し

つように攻撃をしかける敵を排除し、長駆七百キロ南昌の南まで進撃したのだから、中国軍に対してはまさに無敵であったといえよう。

五月三十日、惠州発、六月初旬三南作戦、七月初旬再び遂川飛行場を攻撃し、七月十日贛州をへて贛江左岸を北上するが、このころより双胴の戦闘機P38の来襲がまたひんぱんとなり、たびたび機上掃射を受けるようになった。また、夜間行軍となり昼間は馬も家のなかに引きこめて炊飯の煙も細心の注意を払った。八月中旬、突然無人の荒野にはいる。そこに点々とある部落はいずれも完全な廃墟となっていて満足に屋根のあるものはまったくなく、田畑は草に伸びるにまかせ、道も橋も破壊つくされていた。そこは南昌の南十字星ほどのところにある中支軍の第一線から、さらに南方に幅十里にわたってつくられた日本軍と中国軍の緩衝地帯で、さる昭和十三年日本軍が南昌を占領して以来、六、七年このような状態がつづいているのだという。

この通過は昼間だったが前方に敵なく、しかも後方から追尾もない。連日しつように来襲した米軍機も姿を

見せず、八月十七日我々は南昌地区日本軍の第一線、西山万寿宮に到着した。

我々が日本軍の兵舎の脇を通過していくと、兵隊が典範令やその他の書類を焼いている。なにごとだと聞くと戦争は終わったのだという。この日宿舎についてからあらためて終戦の本命が発せられたと伝えられた。我々なんとも複雑な気持ちだった。

振り返って見れば、我々は大陸縦断二千キロに及び、多くの戦友と軍馬を失い、しかも今ここに終戦の本命、なんのためのいくさ、国家の隆昌を念じ、上官の命に服し、青春のすべてを軍務にもやしつづけた。我々の心に残されたものはなにか、戦争の悲惨さではないか。再び繰り返してはならない平和のとうとさを今こそかみしめている。

湖北殲滅作戦

愛知県 吉田新一

昭和十七年十月二十八日、召集を受け、幸三七二一部隊留守隊に入隊、五十日の教育を受けたのち、十一月末宇品港を出帆、玄海灘で船酔い、釜山港に上陸する。

十二月北支まわりで貨車輸送、浦口につく。南京に渡り二日、漢口に上陸し広水まで汽車でゆき、そのご徒歩で応山の幸三七二一部隊・連隊本部に到着する。

杉崎中尉が受領、その場で宮庭から裏山のポールを一回りして早い者より一列に並ぶ。自分は三番に到着、五番までその場に残り、あとは各中隊から受領に来ている下士官の命令にしたがえということでした。

各中隊に引率されたのち、杉崎中尉いわく、「ここに残った兵隊は連隊本部に残れるから幸せだと思え」といわれたが、連隊長以下曹長まで十六人、初年兵のため敬礼ばかりである。